

《翻 訳》

センチメンタル ジャーニイ

——フランスとイタリーを巡るヨーロッパ師の旅——

ローレンス・スターン 作
小林 亨 訳

——フランスぢゃ、こういうことはもっとうまくやっていますよ、とわたしは言った。——

——するとあなたは、フランスへおいでになったことがおありなんですね？ 相手はきっとわたしに向き直り、慇懃無礼この上もない態度でさも得意気に言っただけだ。——こりゃ妙なこった！ わたしはつくづくと独りごちた。ドーバーからカレーまで、たかだか21海里の舟旅で、こんなことを言える権利が貰えるなんて——それぢゃ自分で行って調べてみようと、わたしはそれっきりやりとりを打ち切って——まっすぐ宿所へ帰って行き、シャツ六枚と絹の黒ズボン一着を鞆につめた——「上着はいま着ているもので間に合うさ。」袖口を眺めてそう言う——わたしはドーバー行きの馬車におさまった。そうして定期船は翌朝9時出帆——午後3時にはまぎれもなくフランスで食卓につき、フリカセのチキンを食べていた。だからもしその晩、わたしが食べすぎから消化不良で死んでいたら、「外国人財産没収法」* の効力は誰にも止めることは出来ないのだから——わたしのシャツ・黒絹のズボン——旅行鞆、その他あらゆる持ち物は、フランス国王に召し上げられていたであろう——エライザ¹⁾よ、わたしが長い間身につけ、またお墓までも持って行こうとよくあなたに話していたあのあなたの小さな画像さえも、わたしの首から引きちぎられていたでしょう。——なんてむごいことをなさるんです！——国王様、あなたの国民に招かれてこの国の海辺にやって来たのん気な旅人の形見の品まで取り上げるなんて——ああ

陛下！ それはあんまりひどすぎます。それにわたしが御説得申し上げようとする相手が、教養あり礼儀正しく、情誼と洗練された感情とで名高いフランス国民の君主であらせられるとは、なんとも歎かわしいことでございます——

ところでわたしは、まだ陛下の御領内に足を踏み入れたばかりなのです——

* (原註) フランスで死ぬすべての外国人旅行者(スイス人とスコットランド人を除く)の動産は、たとえその場に相続人がいようと、この法律の適用によって没収される——このような不慮の事故からの収入は、一旦徴収されると返却されることはない。

カレー

わたしは食事を終え、フランス国王の健康を祝して杯をあげたが、それは、陛下になんの怨みもいただいていない、それどころか陛下のお心の優しさを讃歎してやまないことを、われとわが身に納得させようとするためであった——そうしてこの仲直りでなにか背たけが1インチも伸びた思いで立ち上った。

——怨みなんかこれっぽっちもありませんよ——とわたしは言った——ブルボン王家は決して残酷なお血筋ぢゃなし、並みの者みたいに間違いをなさることもあるかも知れないが、根がお優しい方達なんだ。このように得心すると、わたしはわが頬に心地良い血のみなぎりを覚えたが——それはバーガンディ葡萄酒(すくなくともわたしが飲んでいたような1びん2リーヴルのもの)からは得られない、暖かな人間味のこもった頬のほてりであった。

——えいくそ！ わたしは旅行鞆をわきへけとばすと、こう独りごちた。われわれの心をとがらし、優しい心を持った多くの同胞を、世間によくあるようなひどい仲たがいにおとし入れるこの世の財貨というものに、一体どんな価値があるというんだ？

人はお互いに仲良くやっている時には、どんなに重いお金でも羽毛より軽いものとしか感じないものである！ 財布を取り出すと、浮き浮きした気分でゆったりとそれを手に持ち、まるで一緒に費う相手を探すかのように、あたりを見廻すものだ——わたしもそうやってみると、体内のあらゆる血管がふくれ——動脈は楽しげに脈うち、生命を支えている活力全部がほとんど何の障害もなく活動したので、これを見たらフランスの折紙つきの女流唯物主義者達

も、たいていあわてふためいたであろう。彼女達の唯物論をもってしても、先づわたしを一個の機械と呼ぶことは出来まい——

これを見たら彼女達の信念もきっとひっくり返っただろうに、とわたしは独り呟やいた。

それでその考えが強まると、自然の情がこの上もなく高まり——すでに世間とは仲直りしていたので、こんどはわたし自身との和議を締結した——

——いまわたしがフランス国王だったら——みなし児が死んだ父親の旅行鞆をわたしに請願して取り戻す絶好の機会なんだがなあ！ わたしは思わず叫んだものである。

修道僧

カレー

わたしがそう叫んだかと思うと、聖フランシス派²⁾の一人の貧弱な修道僧がわたしの部屋に入って来て、彼の所属する僧院のために何ほどかの喜捨を求めた。誰しも自分の善行を偶然にもてあそばされるものにしたくはない——また、人によって寛大な人もあれば権利を誇りたい者もあるが——「それには別段の理由もない」——それはそれでよいだろう——というのは、人の気分の満ち引きはどんな理屈でも説明出来はしないし、さしづめこれは潮に影響を与えるものと同じ原因によるものかも知れない——そうだと考えても、別して不面目な話ではないようである。すくなくともわたしとしては、かなり罪にもなり恥にもなるようなことをしているので、わたし自身の所業として見られるよりは、「あいつは月の影響でおつむが狂ったのだから罪もなければ恥にもならない」と世間さまから言われた方が、多くの場合はるかに満足がいくというものだろう。

——しかしそれはそれとして、わたしがその僧に視線を向けた時、わたしは彼にびた一文やるものかと心に決めてしまった。それでポケットに財布を押しこむと——その留金をかけ——身をそらせて彼の方へ威高げに進み寄った。わたしの顔付きにはとりつくしまもないような表情が表われていたかも知れない。いまこの瞬間にもわたしの眼の前には彼の姿が見えるのだが、その姿にはもっと丁重に扱うべき品格があったと思う。

その僧は、剃髪部のまわりの禿げ具合、こめかみのあたりにすこし残っている白髪から判断して、70歳位と見うけられたが——年齢よりもむしろ礼讓から和らげられていると思える鋭い眼光からは、60歳を越えているとは見えなかった。真実は——中庸にありとすれば——彼はまさに65歳であろう。そうして彼の容貌の全体的な様子は、何かの理由で年の割には皺深く見えたけれども、その推定された年齢を示していた。

それはグウィドー³⁾のよく画いている顔の一つであって——柔和で蒼白く一人の心を見通すような眼をして、俗事にばかり関わりあう、脂ぎった無知な輩の平凡な思想とはまるで無縁に——まっすぐ前方を見つめていた。しかし、まるでこの世の彼方にある何かを見つめているようであった。どうしてこの教団の僧がこのような風貌をしているのかは、僧の肩の上に首をおのせになった天なる神のみがよく御存知である。しかしその顔はインドの高僧⁴⁾に似つかわしく思われたので、もしわたしがヒンドスタン平原でこの人に出会っていたら、その顔に崇敬の念をいただいたであろう。

彼の外貌の他の部分は、二刷毛が三刷毛の描写で出来上るだろう。だからその描写は誰の手に任せても結構である。というのは、優雅でもなければその反対でもないし、性格と表情とが作り出しているままであったからだ。痩せてほっそりとした姿で、並みの背たけよりすこし大きかったが、その時は身をこめていてその特徴が目立たなかった——つまり喜捨を乞う姿勢であったが、いまわたしの想像に現われた姿は、そのために見すばらしく見えるどころかむしろ立派に思えるのである。

僧は三步部屋の中に進み寄ると静かに立ちどまり、左手を胸に置いた。(右手には、歩くのに使う細身の白い杖を持っていた。)——わたしが近寄ると彼は自己紹介をして、修道院の窮乏と教団の貧しさをすこし語ったが——その話し方には自然な気品があり——また全体の表情物腰には人様に迷惑をかけまいとする態度が見られた——そのような様子にわたしが感動しなかったのは、その時なにか魔法にでもかかっていたとしか言いようがない——

——もっと然るべき理由は、びた一文やるまいとわたしがすでに決心していたことであった。

修道僧

カレー

——そりゃまったくですね、彼が話を終えて上目づかいに見た視線に答えて、わたしは言った——まったくそうですよ——それで世間の喜捨だけを頼みの綱にする人達は神様におすがりしたらいいんです。世間全部の資産を掻き集めても、あちこちから度々ねだられる「大変な要求」には応じ切れなと思いますよ。

わたしが「大変な要求」という言葉を口にすると、彼は伏目になって自分の僧衣の袖に眼をおとした——それでわたしは精一杯の哀願を感じたのだが——それでもこう言った、よく分ります——粗末な衣服、それさえも3年に一度しか渡されないし食事はひどいときている——でもそれはたいした問題じゃない。ほんとに哀れな点は、ちょっと働けば世間ではそれ位は稼げるのに、あなたの教団は手足の不自由な人、盲人、年寄りや病人達が当然貰えるお金を、なんとかせびり取りたいと思ってる点ですよ——毎日指折りかぞえて苦しい日々を送っている囚われの身にある人達だって、同じようにその分配にあづかりたいと願っているんです。もしあなたが聖フランシス教団でなく「慈悲教団」⁵⁾のお方だったら、わたしも貧しい人間ですが、そう云って、旅行鞆を指さしわたしは続けた。不幸な人達への償い金として、それこそ喜んで鞆のふたを開けてあげたでしょう——僧はお辞儀をした——わたしは続けて言った、しかし誰よりもわが国の不幸な人達に、なんといっても第一の権利がありますからね。そしてわたしは自分の国に何千という苦しんでいる人達を残して来ているんです——僧は心から同意を示すようにうなづいたが——それは、勿論私の僧院だけでなく世界の到る所に不幸はあるのです、とでも言うかのようにであった——僧の訴えに答えて、わたしは彼の法衣の袖に手を置いて次のように言った——しかしお坊さん！ わたし達は区別するんです。自分で稼いだパンを食べる人達と——他人のパンを食べ、「神を引き合いに出して」怠惰と無知で過ごそうとするほかに何んの人生の目的もない連中とは、やっぱり区別するんですよ。

その哀れなフランシス教団の僧は何んとも答えなかった。しかし一瞬頬にさっと赤味がさしたが、それもすぐに消えた——天性のやさしさが彼の内部に起

った憤りの念を鎮めたようであった。彼は怒りの表情をすこしも示さずに——杖を小脇にかかえると、諦めた風に両手を胸に押しつけて出て行った。

修道僧

カレー

その僧が扉を閉めたとたんに、良心がわたしを苦しめた——ちえっ、ばかな！ わたしは無関心をよそおって、三度も繰りかえして言った——ところがどうして、うまくいかなかった。わたしが口に出したあの一つ一つの不禁慎な言葉が、次ぎ次ぎとわたしの心に戻って来た。彼の申し出をはねつけるほかには、あの貧しい僧に対してわたしは何の権利もなかったのだ。ことさら不親切な言葉をつけ加えなくとも、うちひしがれた者にはそれだけで充分こたえたのに、とわたしは反省した——わたしは彼の白毛まじりの髪の毛を想った——するとあの礼儀正しい姿が再び部屋の中へ入って来て、あなたにどんな御迷惑をおかけしましたか？ とわたしに優しく訊ねるように思えた——そしてまた、どうしてあなたはあんな仕打ちをなさったのですか、と訊ねるようにも思えるのだった——その時わたしを弁護してくれる人がいたら、わたしは20リーヴルだって支払ったであろう——ひどい無作法を働いてしまったものだ、わたしは心の中で呟やいた。けれどもまだ旅に出たばかりなのだ。この先旅を続けるうちに、わたしにももっと良い振舞いが身につくことだろう。

デソブリジャン 一人乗り馬車

カレー

人が自分自身に腹を立てている時には一つだけ利点があるもので、それは買物をするにはもってこいの心構えになれることである。ところで、フランスやイタリーを旅行するには馬車を持たないとやっていけない——そしてこんな時は自然と分相応のものを探そうとするもので、わたしは目的にかなったものを何か一台買うか雇うかしようと、駐車場へと歩いて出掛けた。すると広場の一番はしにある古ぼけた「無愛想馬車」* がひと目でわたしの気に入ったので、早速その中に乗ってみると、わたしの気分^{デソブリジャン}に先づぴったりという乗心地であっ

た。それでわたしは宿の給仕に主人デサン氏を呼んで来てくれと言った——ところがデサン氏は夜の祈禱に出掛けていて居ないというし、さきほどのフランス会の僧とは顔をあわせたくないし、というのは丁度広場の反対側でいま宿に着いた一人の婦人と彼が話し合っているのが見えたからである——それでわたしは平織絹タフエタのカーテンを引き、旅行記を書こうと心を決めてペンとインクを取り出し、その「馬車」の中で先づ序文を書いたのである。

* (原註) 一人しか乗れないので、フランスではこう呼ばれている馬車。

序文

デソブリジャン 一人乗馬車の中で

数多くの逍遙学派⁶⁾の哲学者によって観察されたに違いないのだが、自然というものは犯し難い権威をもって、人間の不満を制限する境界や障壁を作り上げているものである。つまり自然は、人間に自分の故国で安楽を得たり苦悩をしのいだりする恩恵を与えることにより、全くおだやかに全く簡単にその目的を達している。人が自分の幸福を分かち合い、あらゆる国あらゆる時代を問わず、自分一人で担うには重すぎる人生の重荷を一部かついで貰うのにもっとも適した者を、自然が与えてくれるのは、自分の故国においてだけである。自分の幸福を不完全ながらも時には自然の限界をこえて拮げるといふ、わずかな能力をわれわれが与えられることは事実である。しかし自分の故国を離れては、縁故や頼る人がすくないとか、教育、風俗、習慣などの違いから、しばしば全く絶望的といえるほどに相手に感情を通じさせることが難かしい状態にあるのが実情である。

このことから、人の心情の交わりを差引勘定してみると、これは常に故国を離れて旅する者には不利なことになる。つまり、殆んど必要でない物も言い値で買わなければならないし——言葉は分って貰えても、たいてい大きく割引きされて受けとられることになるのである——ついでに言えば、誰しも自分の言葉を一層正しく理解してくれる人には絶えず頼るようになるので、その旅行者の仲間がどんな人間かを推察するには、たいした洞察力などを必要としないものである——

ここでわたしの本題に達する。そして自然に（もしこの「一人乗馬車」の揺れ具合が、ひたすらわたしの筆を進めさせれば）、旅行の最終目的と共にその効用ともいうべきものを述べる運びになる——

次の一般的原因のいずれか、あるいはいくつからおきる理由で、故国を離れ外国を旅する例のやくざな連中がいる——

肉体の虚弱、
精神の薄弱、あるいは
やむを得ない必要。

初めの二種は、陸路または海路を旅し、無限に細分化され組み合わされる傲慢、好奇心、虚栄、あるいは癩癩などでもがき苦しむ連中を含む。

第三のものは、諸国を廻る殉教者の群をすべて含んでいて、特に僧籍者の特権にかくれて旅する者、つまり行政長官の推薦になる教悔師の指導の下に旅する犯罪者とか——両親や保護者の冷たい仕打ちで厄介払いされ、オックスフォードや、アバディーン、グラスゴーなどの大学から推薦された監督者の下に旅す若い紳士達も含むのである。

第四の種類もあるがこの数は非常にすくないので、特に扱う値打ちもないほどだが、この種の著作では、特色の区別がつかなくなるのを避けるために最大の正確さと精密さを必要とするので、特筆するのである。ここに述べるこの手の連中は、さまざまな理由、いろいろな口実から、金を貯めこむ目的で海を渡り、見知らぬ国を旅する人達なのである。ところが自国で金を貯めれば、自分にも他人にも多くの余計な手数をかけないですむし——また彼等の旅の理由は、ほかのどんな種類の旅行者よりも別段混みいったものではないので、わたしはこれらの紳士達に次の名称を与えて区別する。

単なる旅行者。

このようにして、旅行者全体は次の「項目」に整理されることが出来よう。

なにもしない旅行者、
好奇心の強い旅行者、
嘘つきの旅行者、
誇り高い旅行者、

虚栄心の強い旅行者、
癩癩もちの旅行者、
続いて、やむを得ない旅行者、がくる。

罪を犯し兇悪な旅行者、
不幸だが罪なき旅行者、
単なる旅行者、

そして、しんがりを勤めるのは（失礼して御紹介すれば）

感じやすい旅行者（わたし自身がこれにあたる）であって、全種類の誰よりも「必要」にかられて旅に出た者、つまり「やむを得ない」旅人——その旅行について物語ろうと、わたしはいまここに坐っているのである。

と同時に、わたしの旅行も観察もこの道の先輩達のものとはまったく違った形のものになるので、わたしだけの専用としてまるまる一項目全部が与えられて良いものと承知している——しかし、わたしがただ「乗物の新奇さ」以上のなにか尤もな理由を持たない限りは、自分に読者の注意を集めたがるということで、「虚栄心の強い旅行者」の仲間に入り込んでしまうだろう。

もし読者自身が旅行をしたことがおありなら、この点をよくご研究、ご考察頂ければ、この分類表でご自分の地位と階級とを決定することが充分出来ることであろう——それは、自分自身を知ることへ一歩前進することなのです。おそらくその人は、旅によって吸収したものや実行したものの色合いとか形とかを、いく分かは現在まで保存しておられるだろうからである。

最初にバーガンディの葡萄を喜望峰に移植した人は（彼がオランダ人であったことに注目されたい）、それと同種の葡萄がフランスの山々で醸し出すのと同じ葡萄酒を、その土地で飲もうとは夢にも思わなかった——彼は非常に冷静だったからそう思わなかった——しかし当然彼はなんらかの葡萄酒性の飲料水が飲めると期待していた、極上のものか下等なものか、それとも並みのものかは別としてである——彼はこの世間というものを良く知っていたので、何事も自分の思惑どうりに行くものではなくて、いわゆる「運」というやつが自分の成功を決定するものだと分かっていたのである。しかし彼は最善を願い、そう願いながら自分の頭脳の力と思慮の深さとを思いすごし、このオランダ人先生、

自分の新しい葡萄園でその両方共をだめにしてしまい、無一文丸裸になったところを世間にさらして、同胞の笑い物にならないとも限らないのである。

知識と進歩とを求めて、世界のより文明の進んでいる国を、船に乗り馬車に乗って旅する「あわれな旅行者」についても、また正にその通りといえる。

知識と進歩とは、それを目的として船で旅し馬車で旅すれば得られるものである。ところが、有用な知識であるか真の進歩であるかは、全く宝くじのようなものであり——またたとえ旅行者が成功した時でも、手に入れたものを有益に使うためには、用心深く真剣にそれを使用しなければならない——しかし獲得するについても適用するについても、思い通りにはいかない場合はなはだ多いので、わたしは次のような考え方をしている。つまり、もし人が外国の知識や進歩がなくても満足して生きていけると自分を説得出来れば、特に二つながらひどく欠乏しているわけでない国に住んでいるのなら、自国にあっても外国にいるのと同じように賢明に暮せるであろう——そして「好奇心の強い旅行者」が、名所旧跡を見て珍しいものを探すのにどんなにいろいろな忌むしい手段をとったかを観察した時、わたしは何度も心の哀しみに傷ついたものである。それはすべて、あのサンチヨ・パンサがドン・キホーテに語ったように、自分の国にいても手近かに楽をして見られたものなのだ。光に満ちた現代なのだから、自国の光が他の国々をよぎり交錯しないような国は、このヨーロッパの隅々にも殆んどないであろう——たいていの分野、たいていの事柄では、知識というものはイタリーの街角の音楽のようなもので、誰でも金を払わないで聴けるものである——しかしこの世のどんな国も——神はわたしの言葉を記録されるので、(いつかは神の裁きの場で、わたしはこの作品について申し開きをしなければならないのです)——わたしは大言壮語をしないが——この世のどんな国でも、英国ほどあらゆる種類の学問が満ち溢れている国はない——また英国ほど、学問が適切に求められ確実に獲得される国もない——英国ほど、芸術が鼓吹され、そして見るまに高揚され——人の心は(全般的にいえば)殆んど弁明するような欠点もなく——つまりは、英国ほど心の糧となる機智の豊富さ、性格の多様性のある国はないのである——それなのに、同胞の皆様方、あなた達は一体どこへ行こうとなさるのですか——

——わたし達はただこの馬車を見ているだけです、と彼らは言った——これはこれは、今日は、わたしは馬車から飛び出し、帽子を取って挨拶した——彼らの中の一人「好奇心の強い旅行者」とわかる人が言った——一体なんであんなに馬車が揺れているのか不思議に思ったんですよ——わたしは落ち着きはらって答えた、序文を書いていた心の動きだったんです——「一人乗馬車」の中で序文を書くなんて、聞いたことはありませんね、と「単なる旅行者」が言った。——「二人乗馬車」ならもっと良かったでしょうね、とわたしは答えた。

——「英国人は英国人に会うために旅行をするわけではないので」、わたしは自分の部屋へと取って返した。

カレー

わたしの部屋に通じる廊下を歩いて行くと、わたし自身ではない何かが廊下に蔭を作ったのに気がついた。それが実は宿の主人デサン氏であった。夜の祈禱から今しがた帰ったところで、帽子を脇の下にはさんで、まったく愛想良くわたしの後について来たが、わたしの用向きを思い出させようとする風であった。「一人乗馬車」のことについては、わたしはもう飽き飽きするほど書いてしまったが、デサン氏は、あの馬車はあなた様には向きませんよ、と言わぬばかりに肩をすくめて、その馬車について話をし始めた。それでわたしは、その馬車が誰か「罪なき旅行者」のものであったが、帰国するについて処分をデサン氏に一任されたものだと、直ぐに思いついた。その馬車は、ヨーロッパでの仕事を終えてデサン氏の馬車置場の隅に収まってから、4ヶ月は経っている。そして、そもそもから修理がやっとのポンコツ車として当地を出発したのだから、セニス山の上で二度もバラバラになっても、その大儀な旅によってさして利益は得られなかったであろう——しかし何ヶ月もデサン氏の馬車置場の隅に放っておかれるほど無益なことはあるまい。実際、あまり賞め言葉も見当たらない馬車ではある——しかし何か取り柄はあるかも知れない——そして、一言二言で苦しみから哀れな者を救えるのに、その言葉を惜しむ輩をわたしは憎むものである。

——わたしは人差指をデサン氏の胸元にあてて言った、ところで、わたしが

もしこのホテルの主人だったら、わたしは必ずなんとかしてこの不運な「一人
ブリジャン
乗馬車」を片付けてしまおうとするだろうね——君がその傍を通るたびに、う
らめしそうに君を見て車体をゆすってるじゃないか——

「これはどうも！」わたくしは一向に関心がありませんが、とデサン氏は言
った——ある種の心を持った人達が自分自身の気持に関心を持つ、それ以外に
は関心がないんだね、デサン君、とわたしは言った——自分と同じように他人
の心にも感じる人にとっては、君はそれをかくしてゐるけれども、雨の降る晩な
どは気が滅入るものだよ。デサン君、君もあの馬車と同じ位苦しんでいるん
だ——

相手の言った言葉に「甘い所」と「苦い所」がある場合、わたしの観察によ
ると、英国人はそれを受け入れるか知らんぷりをしているか、いつも胸の中で
迷うものだが、フランス人は決してそんなことはしない。デサン氏はわたしに
お辞儀をした。

「まったくおおせの通りです。」と彼は言った——

しかしこの場合、わたくし共は一つの不安を別の不安にかえるだけで、しか
も損をするのでございます。お客様、ここの所をお考え下さいませ、パリに半
道も行かないうちにバラバラにこわれるような馬車を、あなた様にお売りする
なぞ、とんでもないことでございます——名誉あるお方にわたし共の悪い印象
をお与え申して、「才智に富んだお方」に当然のことながらまったく頭の上ら
ぬようなことになれば、わたし共はどんなに苦しまなければならないか、お考
え下さいませ。

薬はわたし自身の処方そのままに調合された。そうならば飲まないわけには
いかない——わたしはデサン氏にお辞儀を返すと、それ以上詭弁を弄さず、手
持ちの馬車を見ようと一緒に彼の「馬車置場」へ出掛けた。

通りにて

カレー

買手が（たとえそれが一台の貧弱な馬車であっても）売手と取引をまとめよ
うと一緒に通りに出ると、途端にまるで Hyde Park の片隅で決闘でもしよ

うと歩いて行くような、そんな気分になって、そんな眼で相手を眺めるとなる
と、これは敵意に満ちた世の中と言わざるを得まい。わたしの方としては、下
手くそな剣術使いにすぎず、デサン氏とはまったく勝負にならないので、心
の中にあらゆる思いが馳けめぐるのが覚えたが、これは当然の状況であった——
わたしはデサン氏をとっくりと眺め——歩いて行く彼の横顔をまじまじと眺め
——それから正面^{フツアス}から眺め——こいつはユダヤ人みたいだ——いやトルコ人か
も知れぬと考えたり——こいつの鬢は気に食わないと思ったり——畜生めと心
の中で悪態ついたり——悪魔にでも食われてしまえと念じたりした——

——だまされて儲けられても、たかだか三つか四つの20ルイ金貨なのに、そ
んな目くされ金のために、こんな思いがわたしの心の中で燃え上るなんて？
——なんとまあ卑しい根性なんだ！突然気持の変わった人が自然によくやるよ
うに、わたしはぐるりと向き直って言った——なんて卑しい根性なんだ！お前
の手が世間に逆らうから、世間もお前に逆らうのぢゃないか——とんでもござ
いませぬわ、彼女が手を額にかざして言った。つまり、さっき修道僧と言葉を
交わしていた婦人と、まともに向き合ってしまったのである——彼女は、気づ
かれずにわたし達の後について来たというわけであった——これはこれは、と
んだ失礼を！とわたしは言って、彼女に手を差し出した——彼女は、親指と人
差指、それに中指だけが出ている黒い絹の手袋をはめていたので、ためらいな
くわたしの手を受けた——それでわたしは、彼女を「馬車置場」の戸口へと導
いたのである。

デサン氏は鍵が合わないので、50回以上も「畜生めと口走った」あげく、違
った鍵を持って来てしまったことに気が付いた。それにわたし達も彼と同様鍵
が開かないのにしびれを切らし、鍵の具合が悪いのにすっかり気を取られてい
たので、わたしは殆んど気付かずに彼女の手をずっと握っていた。そこでデサ
ン氏は、その場にわたし達を残して出掛けて行ったが、わたしは彼女の手を握
ったままで、二人は「馬車置場」の戸口に顔を向けていたのである。彼は、5
分も経ったら帰って来ますと言って出かけて行った。

ところでこのような場合の5分間の会話は、二人が通りに顔を向けている五
世代もの会話に匹敵する。つまりそんな風に顔が通りに向いていれば、会話は

戸外での色んな事物や出来事から引き出されるが——眼がまったくの空間に向けられていると——まるっきり自分自身の中から引き出すより外に手はない。デサン氏がわたし達を残して立ち去った後では、一瞬の沈黙もその場には致命的なものとなったろう——黙っていれば、彼女は必ず振り向いてしまったであろう——そこでわたしは、直ちに会話を始めたのである。——

——けれども一体この誘惑が何んであったかは（わたしはこの旅での心の弱さを弁明しようとするのでなく、それを叙述しようとするので）——わたしが誘惑を感じたのと同じ素直さで述べようと思うのである。

馬車置場の戸口

カレー

わたしが読者に、修道僧が丁度宿に着いたばかりの婦人と親しく話をしているので、わたしは馬車から出たくなかったと述べた時——わたしは真実を語ったのであった。しかしまるまる真実を語ったのではなかった。と言うのは、修道僧の話している婦人の容貌客姿にすっかり魅せられてしまったからである。疑念というやつが脳裡をかすめて、こう呟いた。あの僧は、さっき起ったことをあらいざらい彼女に話しているんだぞ。わたしはなにか嫌な気分になった——僧が修道院にじっとしていてくれれば良かったのに、と願う思いであった。

感情が理性より早く走り出す時には、それは判断に余計な苦勞をかけないで済むものである——わたしは彼女が由緒正しい家柄の女性であると確信した——けれども、それ以上考えないで「序文」を書き続けたのであった。

その時の印象が、彼女と通りで出会った時、わたしの心によみがえって来た。わたしに手を与えた彼女の構えた打ち融けようは、彼女の立派な教育と良識とを物語っていると考えた。彼女を案内して来た時、わたしは彼女に楽しくなるような素直さを感じたが、それはわたしの心に隅々まで静けさをもたらしてくれた——

——ああ！このような女性を連れて世界を旅行できたら、男冥利につきるものを！——

わたしはまだ彼女の顔をまともに見ていなかったが——それは別に重要なこ

とではなかった。想像の筆がたちまち描き初め、わたし達が「馬車置場」に着くずっと前に「空想」は顔全体を描き上げ、まるでタイバー河を探って求めて来たかのように、自分の女神にふさわしい姿に大満悦の態であった——しかれども空想よ、汝は誘惑され且つ誘惑するみだらな女性である。而して汝の画く絵姿や空想の像によって、1日に7度もわたしを騙そうとも、魅力に満ちた様々な姿で欺き、多くの光輝やく天使の姿で汝の絵姿を飾り立てているので、汝と訣別するのは恥と思わなくてはならぬ。

わたし達が「馬車置場」の戸口に着いた時、彼女は額にかざしていた手をおろしたので、顔をすっかり見せてくれることになった——26歳ばかりの明るく澄んだ浅黒い顔立ちで——口紅もお白粉もつけず、淡白に粧おっていた——決して美人とは言えなかったが、わたしのその時の気持を美人以上に魅きつけるものを持っていた——その顔はなにか興味をそそるものであった。夫を失った女性の相貌の特色といったものを帯びている、とわたしは想った。しかも服喪の期間も悲しみの激しい最初の二期間が過ぎて、いまは夫を失ったことを静かに諦め初めている状態にあるのだ——それとも他の様々な人生の苦渋が、このような皺を彼女の顔によせたのだろうか。それならその苦渋とはなんなのか、わたしは知りたいと願った——そして（エスドラス⁷の時代のように「上品な」^{ポントソ}会話がわたしに許されるなら）いっそこう訊ねてみたかった——「汝を悩ますものは何ぞ。何故に心安らかならざる？はたまた何故に思い乱るる？」——つまりは、わたしは彼女に同情の念をいただいていたのだ。そうしてたとえ奉仕とはいえないまでも——何んとかして心ばかりの思い遣りを彼女に捧げようと決心したのである。

わたしの受けた誘惑とは、このようなものであった——そしてこの誘惑に身をゆだねたい気持で、わたしは彼女の手を取り二人だけでそこに立っていた。二人共、それこそ必要以上に「馬車置場」の戸口に顔を近づけて。

馬車置場の戸口

カレー

これは確かですね、奥さん！わたしは彼女の手をちょっと軽く持ちあげて、

話を切り出した。「運命の女神」のなすいたづらの一つに違いありませんね——まったくの赤の他人である二人の男女が、しかも地球の違った方角からやって来たのでしように、お互い手を取り合って、「友情の女神」が一ヶ月も計画したって、とても果せないような親しい仲になってしまうなんて、そうに違いありませんよ——

——あなたがそうお考えになるのなら、こうした不意の出来事で、「運命の女神」がどんなにあなたを困らせていらっしゃるのか、よくわかりますわ。——

物事が思わく通りになった時には、そうなった事情を匂わすほど無風流なことはありませんわ。あなたは神様に感謝していらっしゃる、と彼女は続けて言った——それだけの理由がおありですし——心はちゃんとそれを承知して満足しておられる。ですから英国の哲学者でもなければ、誰が心の判断を変えるのにおつむに知らせるなんてことをするでしょう？

そう言うと、彼女は考えを充分裏書きするように思える表情をして、手を離してしまった。

これはわたしの心の弱さを示すなんともみじめな絵であるが、白状してしまえば、もっとひどい事情でも与えることのないような心の傷手を与えられた——彼女の手を失うことで屈辱を受けたが、その手の失い方は手傷を癒す油とも酒ともならなかった。つまり、わたしはいままで人生で味わったことのない劣等感の苦痛を、いやというほど感じたのであった。

本当に女らしい心というものは、このような敗北に長い間勝ち誇っていられるものではない。ほんの数秒経つと、彼女はさっきの答えを済ませようとわたしの上衣の袖口に手を置いた。そこでどうにかこうにか、どうした訳か、わたしは元の状態に戻ったのである。

——彼女は一言もつけ加えなかった。

わたしはその会話の見識と格調から推して、彼女の性格をとり違えていたことが分かったので、早速別の話題をこしらえ始めた。しかし彼女の顔がわたしの方に向き直ると、さきの答えを生き生きとさせていた元気さは消え失せ——筋肉はたるみ、しかも始めに彼女への興味にわたしを引きつけたあの悲しみのあらわな表情を、わたしは見たのだった——あの様な生き生きとした活発さが、

悲しみの餌食になるのを見るのは、なんて傷ましいことだろう！——わたしは心から彼女を哀れに思った。そして無神経な人の心には馬鹿げたものに見えるかも知れないが——この白日下の大通りであってさえも、顔ひとつ赤らめず、彼女をわが腕に抱きしめて愛撫出来たであろう。

わたしの指を伝う血管の脈動が彼女の指を圧して、わたしの内部をよぎる想いを彼女に知らせた。彼女は下を向き——そうしてしばらく沈黙が続いた。

この間に、わたしは彼女の手をもっと強く握りしめようと、いく分力を入れたものに違いない。というのは、わたし自身の掌にほんのかすかな感じ——それは彼女が手を引こうとしたのではなく、手を引こうかと考えたような感じを受けたのであった——そしてもしこの危険な時に、理性でなく本能がわたしに最後の手段を教えてくれなかったら、わたしは必らず彼女の手を再び失ったであろう——それは、彼女の手をいつでも放す気があるというように、やんわりと握っていることであったが、そのために彼女はデサン氏が鍵を持って帰って来るまで彼女の手をそのままにしていたのである。そうしてその間にも、さきの貧しい僧がわたしのことを彼女に話していたなら、それによって彼女がわたしに持ったに違いない悪印象を、どうして拭ったらいいかと、わたしは懸命に思案していた。

かぎ煙草入れ

カレー

あの善良な老僧のことが心に浮んだ時、彼はわたし達から六歩と離れていない所にて、わたし達の間割り込んでいいものやら悪いものやら、決め兼ねているように、ちゅちゅする足取りで歩きながら近づいて来た。——しかしわたし達のところへやって来ると、非常に打ち融けたように立ち止って、角製のかぎ煙草入れを取り出し、それを開いてわたしに差し出した——それよりわたしのをやってみて下さい——わたしは自分の煙草入れ（それは小さな亀甲製のものであった）を取り出すと彼の手に渡した——これはたいへん素晴らしいものですね、とその僧は言った。でしたら、どうぞその煙草入ごとそっくりお納めになって下さい。そして煙草をおつまみになる時、それがあなたを心ならずも冷た

くあしらったことのある男からのお詫びの贈物であることを、時々思い出して下さいませんか、とわたしは答えた。

その貧しい僧は真赤になった。「^{モンデユウ}とんでもない！」と両手をきつく握りしめて言った——あなたはわたくしを冷たくあしらったことなぞごさいません——わたくしもそうだと思いますわ、とその女性が言った。こんどはわたしが真赤になる番だったが、その動機の程は、分析したがる少数の学者諸賢にお任せするでしょう——彼女に答えて言った、失礼ですが奥さん——わたしはこの方をひどく不親切にあしらったのです、しかもわたしを怒らせるようなことは、何一つなさらなかったのに——そんなこと考えられませんわ、とその女性は言った——神に誓って！と僧は思わず彼に似つかわしくない興奮した誓言を口走ってしまった——悪かったのはわたくしの方なのです。あさはかにも気がはやり過ぎたのです——彼女はこの言葉にも反対した。それでわたしは彼女に同調して、彼のように自分を厳しく律している人が他人を怒らすようなことは有り得ないと言い張った。

論争というものが、その時わたしが感じたほど人の感覚に甘く心持良いものになり得るとは知らなかった——わたし達はそれきり黙って立っていたが、物も言わずにお互いの顔を10分も見つめ合っているような状態で起きるあの馬鹿げた苦しさを、何ひとつ覚えなかった。その間中、僧は彼の角製の煙草入れを僧衣の袖で磨いていたが、磨擦によってそれがすこし光沢を帯びて来ると——深く一礼して次のように言った。わたし達をこのような論争に巻きこんだのは、わたし達の性格の弱さかあるいは善良さかと考えるのは、いまさら手遅れというものでしょうが——それはそれとして——どうかお互いの煙草入れを交換して頂きたいのです——そう言うと、彼は片手で自分の煙草入れを差し出し、もう一方の手でわたしのものを受け取った。それからわたしの煙草入れに唇をふれると、眼に善意に溢れた涙をたたえて、それをふところにしまい込み——それから別れを告げた。

わたしは彼の煙草入れを大切に、心を向上させる手助けとなるよう、自分の職業上の法具類をあつかうのと同じようにしている。事実、これを持たずに外出することはめったにない。そしてしばしばこの世の喧噪の中で、自分の

心を律するために、この煙草入れの持主の親切な心を思いおこすよすがとして
いるのである。わたしが彼の履歴から知ったかぎりでは、彼は45歳頃まではこ
の世の雑鬧に巻きこまれていたが、その頃軍人としての功積が認められず、同
時に失恋の傷手を受けたために、軍務と女性とを共に棄てさり、修道院とい
うよりもむしろ自分自身の心の中に、聖なる避難所を見つけたのであった。

次の話を語り加えようとする、わたしの心は重くなるのである。カレーを
通っての帰り道にこのロレンゾ師の消息を訊ねると、彼は3ヶ月ほど前に亡く
なり、彼の遺志により修道院の中ではなく、10キロばかり離れた修道院附属の
小さな墓地に葬られた由であった。わたしはその埋葬された場所を是非とも
確かめたいと思った——それで、彼のお墓の傍に坐り、彼の小さな煙草入れを
取り出し、そのあたりに生えているのは場違いのようないらくさを一、二本引
き抜くと、そういう一切の状況が強くわたしの感情に迫って、思わず涙が溢れ
出たのであった——しかしわたしは女の子のように弱い人間なのです。ですか
ら、世間の人達はわたしを笑わないで、憐みをかけて下さい。 (続く)

テキストは、Laurenee Sterne: *A Sentimental Journey through France and Italy*
by Mr. Yorick Edited by Gardner D. Stout, Jr. (Univ. of California Press 1967)
を使用し、Oxford English Novels 版その他を随時参照した。

注

- 1) エライザ Elizabeth S. Draper といい、東印度会社社員の妻。1767年英本国
に滞在中スターンと出会い、恋愛に陥いる。インドへ帰った彼女宛に綴ったスタ
ーンの記事は、Journal to Eliza として知られている。
- 2) フランシス派 St. Francis of Assisiが創設し、1210年ローマ教皇の認可を得
た托鉢僧の団体。いわゆるフランシスカン派。
- 3) グウイドー Guido Reni (1575—1642) イタリア、ポロニア派の巨匠。その絵
はイギリスの旅行者に好んで鑑賞された。
- 4) インドの高僧 原文は Bramin (インドの僧職階級で、四姓中最高位にある人)。
因みに、スターンとエライザはそれぞれ Bramin, Bramine と称していた。
- 5) 慈悲教団 The Order of Our Lady of Mercy のこと。ムーア人に捕えられた
キリスト教徒の救出資金を作るために、1218年スペインで創設された。1568
年に、女子修道会が生まれた。
- 6) 逍遙学派 アリストテレス学派。アリストテレスがアテネの Lyceum の園を逍
遙しながら門弟に教えたことから出ている。
- 7) エストラス ここでは旧訳聖書外典エズラ第二書第10章31節に言及している。